矢内原忠雄の留学日記

福田秀一

一

今回は経済学者で内村鑑三の高弟としても名高く、東大総長をも務めた矢内原忠雄の留学日記を取り上げ、同じ経済学者の河合栄治郎のそれとも対比して次回と分載にする。二人は一高時代からの友人（河合が二年上）で東大経済学部では同僚であり、前後して欧米に留学して、その期間の日記が（矢内原の場合は前半のみだが）それぞれの全集に収められているばかりでなく、戦時中、理由・事情は必ずしも同じではないが、著作の思想故に東大の教壇を追われた共通点[1]を有する。

そして矢内原は、専門の植民地政策に関する著述の他に、処女著作『基督者の信仰』（留学中の大正十年、聖書研究社より刊行）や個人誌『嘉信』の刊行などキリスト教の伝道活動がよく知られており、一方河合は、社会政策その他の専門書以外に『学生と読書』『学生と社会』以下学生向けのシリーズ「学生叢書」[2]（昭和十年代に日本評論社刊）の編者として、当時の学生や青年に大きな影響を与えた。それらの点でこの二人も、本業以外の分野でも知られた文化人学者として、このシリーズに入れてよいであろう。

二

矢内原忠雄は、大正九年十月から十二年二月まで約二年半、欧米に留学した[3]。大正六年三月に東京帝国大学法科大学政治学科を卒業した彼は、家庭の事情もあって郷里（愛媛県越智郡富田村、現在今治市の内）に近い新居浜の別子鉱業所（通称「別子銅山」、昭和四八年閉山）に勤務すべく直ちに住友総本店に[4]入社、新居浜に住んで五月には前年暮から縁談のあった西永愛子[5]を妻に迎え、翌七年五月には長男伊作[6]を儲けていた。その辺の経緯は、注3に挙げた『忠雄伝』に詳しい。

ところがその翌大正八年夏、彼は東大経済学部への招聘を受けた。その年四月経済学部が法学部（その時点までは法科大学）から独立して創設されたとき、それまでは法科大学経済学科で、経済学部独立後は同学

部で、殖民政策の講座を担当していた新渡部稲造教授（矢内原の一高時代の校長で大学でも講義を受ける）が、国際聯盟事務局次長として転出することとなり（就任は翌九年五月）、その後任に呼ばれたのである。

そこで彼は翌九年春上京して、三月から東大に助教授として勤務することになり、[7]その八月、「植民政策研究のため満二ケ年英・独・米（大正一一年一月仏を追加される）へ留学を命ぜられ、一〇月一四日出発」（注3所掲『矢内原忠雄』の「年譜」）したのであった。

この日彼は、この春に居と定めた中野（当時は東京府豊多摩郡[8]中野町）の家に妻愛子と二児（二歳五箇月の長男伊作と丁度三箇月の次男光雄）とを残して（但しその後間もなく、愛子ら三人は金沢の彼女の実家に移る）西下し、神戸から日本郵船の若狭丸で十七日に出帆した。その日の記は、

午前十一時出帆 [9]SS. Wakasa Maru, N. Y. K. 6000 ton, built at Glasgow 1897. My Cabin 1st Class No. 6. 同室東大理学部助教授小林辰男氏、天気快晴航海平穏、文部省の窪田、赤間、菊池三氏、富山薬学専門の望月氏、東北医科の森元氏、第二高等学校長武藤氏、国際交通会議の左竹氏等、英人一、ポーランド人五、独乙人三、智利人二、日本人の乗客多数。（大九・十・1、以下、年月日をこのように略記する）

と始まり、

乗船後主に熱く祈る。彼地に於ても主の御名を崇めさせ給へと祈り、これ迄の主の御導きを感謝し、彼地にありても雲の柱火の柱となりて[10]我が歩みを導き給ひ信仰堕落の危険より我を支へ給ひ、よし彼地にて死するも感謝と讃美のうちに主に至るを得せしめ給へ、もし御心に適はば再び健やかに帰りて家族の手に迎へらるるを得せしめ給ひわが妻わが子わが友凡てを守り給はんことを祈り熱涙滂沱たるを禁じ得ざりき。O! My Isaac!（同前）

航海静穏、四阪島[11]の夜景最も美観、暖流の状景もなつかしく彼地教友の為めに祈る。（同前）

と続いて一日を結ぶ。『全集』に収める日記（留学日記）は十四日から始まっているが最初の三日間は各一～二行で、この日ようやく落着いてやや長文の記を認める気になったものと思われる。

以後その足跡を日記から摘録すれば、次のごとくである。

十・18 「午前九時門司着、上陸」。

19 「正午出版、玄海の月を賞す。宗正路君[12]同室に乗込む。」

21 「偉大なる楊子江を遡り（中略）午后三時上海着、五時上陸（中略）勝田館に宿る。」

22 「（前略）午前七時五十分発車蘇州に遊ぶ、二時間にて達す。（Shanghai-Nan-king Railway）。／勝田館に帰りて宿泊。」（注、斜線は改行の意）

23 「帰船宿泊す。」翌日も上陸して上海観光、「夕食後九時の

ランチにて帰船す。」

25 「午前九時出帆」。

十一・2 「夜新嘉坡港に泊す。」翌日「朝入港、（中略）上陸」。（注、四日の条を欠く）

5 「早朝 Sumatra 島と別る。」（注、六～八日の条を欠く）

9 「夜 Ceylon 燈台を見る。」

10 「午前九時 Colombo 入港（中略）上陸。」翌日「午前十一時出帆」。

19 「夜十一時 Bab-el-Mandeb 海峡の陸地近くを通過す」。翌日「朝アフリカの島を望む」。

24 「Suez 着、（中略）夜七時出帆運河に入る。」

25 「午前十一時 Port Said 着、（中略）午后十一時 Port Said 出帆。」

27 「夜半 Crete 島の南を通過せし筈。」翌日「朝 Crete を後方に望む」。

29 「夜十時イタリーの南端 Messina 海峡を通過す」。

十二・1 「朝八時 Corsica と Sardinia との間の海峡を通過す」。

2 「午前九時 Marseilles 着港、（中略）午后六時四十五分汽車にのる」。

3 「午前九時 Paris の Gare de St. Charles 着、motor car にて Gare de Nord に至り正午発車午后四時半 Calais 着、五時連絡船発、（中略）六時半 Dover 着、（中略）午后九時 London の Victoria Station 着、」Royal Palace Hotel に投宿。

三

この間の記述で注意されるものをいくつか拾えば、先ず東シナ海を航海中に「Countess Ostrowska[13] と日本語及仏語の交換教授を始む」（十・20）とある。英・独語はすでに読書にも会話にも一応不自由ない域に達していたことが後の記事から判るが、この際フランス語も少しは学んでおこうという気になったのであろう。それはマルセイユ上陸後ロンドンに着くまでの当座の必要を考えてか、それ以上の向学心によるものか、恐らくその両方であったろう（この時点では、留学先にフランスを加える計画はまだなかったと思われる）が、その進歩や成果の程は、インド洋航海中に一度「発音にて毎日（注、Countess Ostrowska に）牛耳らる」（十一・11）とある他は、『全集』所収の日記からは知り得ない。ただ、フランス通過の二日間（十・2～3）に記した地名・駅名等の綴りは正確である。[14]

なおこの日、さきの引用（「～交換教授を始む」）に続いて「上海の遠崎市三といふ人（注、未詳）と共に讃美歌をうたふ」とある。

翌日上海では、右の「遠崎氏の案内にて」「同室の小林、宗両君」とともに「太馬路（トマロ）（or 南京路）及四馬路（スマロ）[15]を馬車にて見物」し、

太馬路は最も繁華なる街路、四馬路は昼間は諸種の相場の立つ処なるも夜に入りては tea-house 及び街路の淫売あらはれ行人の袖を引く様肝を消すに値す、上海市街の整然とし道路及交通機関の完備せると共に此の道徳腐敗の盛なる誠に Satan の都もかくやと思ふばかりなり。（十・21）

と記す。四馬路の繁華に驚きその腐敗に眉を顰めた留学者は今までにもあったが、「Satan の都」に譬えるのは彼らしい。

また、これも「遠崎氏の案内にて」蘇州に遊んだ日、「秋日暖く馬上睡魔を催」して「小林氏落ちんとして危く、宗氏遂に落馬す」とあるのも愉快で「寒山寺は見るに足らず」と言うのも一見識であるが、それに続いて

蘇州東洋堂（日本雑貨商）より排日貨（注、他の外貨に比して日本円が排斥されていることであろう）の状況を聞き何故日本人は排斥を受けしやを考へたり。（十・22）

とある一節には、経済学者の関心とともに国際的な視野と当時の日本および日本人への反省の片鱗も見える。

後者（国際的視野と反省）は上海観光の四日目にも、案内してくれた三井物産の竹内勝太[16]なる人が、同地で日本人は「他の外人に比して報酬少く生活程度低く residence の貧弱なる」点から「余等は上海にありて日本人たることを恨むものなり」と言ったことを記した後、

然れども上海在住の欧米人は日本人に比して概して年齢に長じ且つ滞留期長く「楊子江は我妻なり」と言ふ者尠からずといふ。日本人は長くて十年多くは三四年の滞在に過ぎず。日本人の海外住居といふ問題に就て考ふ。（十・24）

と述べているのにも見られる。こうした観察と感想は、彼が東大で植民政策を担当していることから来た使命感によるところもあろうが、今日の海外駐在員にもある程度該当して鋭い。またシンガポールでは「独乙人は上陸を許されず、英独敵視（注、英独が互いに相手を敵視しているの意。当時はヴェルサイユ条約から一年以上も経っていた）は余の心を痛ましむ」（十一・3）とある。

インド洋経由の往路一箇月半の記事は、右のような堅い話題ばかりではなく、「天長節祝日」に甲板に「船員乗客集りて君ケ代を歌ひ陛下の万歳を三唱」した後の運動会で「林檎噛み競争（注、パン食い競争のようなものか）にて苦しむ」（十・31）とあり、おまけに前日来の暑さとその運動とで「健康を害せり」（同、そのため翌一日は「食堂に出でず、室にて茶漬を食ふ」始末）とか、マラッカ海峡からインド洋に出た辺で、シンガポールで下船した「多湖氏寄贈の」「果物を賞味」して、「マングステン、チーサン（バナナ）、ドリアン等いづれも味珍し。ドリアンは臭いので皆いやがりたるも余はその臭ひ及味共実に爽快なるを覚えて皆を驚かしたり」（十一・5）とかも面白く、コロンボで「Thomas Cook & Son の世話にて」自動車で観光して（分乗の際「無礼なる second class の乗客連に妨げられ」とある）「沿道景色日本と酷似す、稲田、茶、鶏、牛、犬、人間等。併し象がのそのそしてくる処などは珍しい」（十一・10）

とか「洋食に飽きてくる」（同・11）とかも微苦笑を誘う。また日々の生活を

（前略）午后は（中略）Auction Bridge なるトランプ遊びを殆ど毎日欠かさず、其他読書、昼寝。五時入浴、七時晩餐、夜は涼風に吹かれ星を眺めさんびかを歌ひて楽しく過し九時乃至十時に寝る。船中一日単純にして気楽なり、（中略）熱帯の空の星のうるはしさ！（十一・11）

と謳歌しているが、それでも最後の引用の中略部分には「常に主我を支へ給ふが故に感謝す」以下、主への感謝とその「御守り」を祈る語を続け、コロンボの「Temple of Buddah's Tooth」は「純然たる偶像寺にて不快を感じたり」と記す。毎朝聖書を読んでいることは右の日課に記されているが、スエズ運河[17]では「Exodus（注、出エジプト記）14、15章を」（十一・25）、クレタ島を越えた辺では「使徒行伝 Paul が Rome に赴ける難航海の章（注、第二七章）を」（同・28）読んでいる。[18]

なお戦前の旅行者には、シンガポールやコロンボで、現地人が接岸した船に泳ぎ寄って船客の投げる銭を潜り拾う光景と時にはそれへの感想を述べている者も多いが、[19]矢内原はコロンボで短く「午前十一時出帆、印度人来り海中にもぐりて銀貨を拾ふ」（十一・11）と記すだけである。

そうした中で注意されるのは、出帆後二月目に入った日の記事である。

涼気甚し、愛子及子供を恋ふの心近来頻りなり、日本を出でてより一ケ月既に帰国の暁を夢む homesick こそあはれなれ。家族と共に此航海を続け居るならば如何にかたのしからん！（十一・17）

出発日の「東京発、愛子及子供と分る」（十・14）および前引（同・17）の「O! My Isaac!」とともに、家族のことを記すのは三箇所だけだが、日夜思っていたことは疑いない。

四

大正九年十二月二日にマルセイユに上陸した矢内原は、先に留学している友人の三谷隆信[20]（数日前に船から「無線電信を発」してあった）からジュネーヴに来ないかとの電報を受け、

（前略）Dr. Nitobe も居ること故訪問せん心組起りしも横山君（注、未詳）がとにかく London に落着く方可なりとて非常に勧められ僕も一人の旅行は覚束なく、健康状態も可良ならず、故に Geneve は勿論 Paris も単に通過に止め（後略、十二・2）

とある。

そして夜行列車に乗ったらしく、「汽車動揺して甚だしく気分不快なり」（同・3）と言うが、続いて「France の田舎初冬の景色美し、村々町々の並木殊に美なり」ともあり、さきにも引いたが、

午前九時 Paris の Gare de St. Charles 着、motor car にて Gare de Nord に至り正午発車午后四時半 Calais 着、五時連絡船発、浪高し、六時半 Dover 着、（中略）午后九時 London Victoria Station 着（後略、十二・3）

という強行軍である。

ともかくこうしてロンドンに着いた矢内原の宿所は、郊外 Woodford (Liverpool Street Station から東北方へ汽車) の Mrs. Cook の家 The Firr's であった。「之れ井上君[21]の世話によりて出来たる余の下宿なり。田舎なり」(同・4) とあるが、しかし (むしろ田舎故に) 気に入り、「これ主の導き給ひし余の住居なり」(同・6) とある。

そこでの日課は、少なくとも当初は、

> 此家の一日は毎朝七時半 maid 戸を knock す。八時朝食、食後 family prayer あり、Mrs. Cook 聖書をよみ祈る。maid 二人も来り列す。祈の時は一同椅子をすべりて跪く。その後余は garden に出で聖書をよみ祈る。実に熱く主なる神に祈る。余は今や此地にありて慣れぬ言葉のみを耳にし口にす、余が母より習ひし日本語を用ふるはたゞ独り言の時と祈りの時のみなり、父なる神はよく余の日本語を領解し給ふ、感謝すべき哉。
>
> 昼飯は外にて認む。夕飯は六時なり。(十二・9)

というものであった。後にもふれるが、まことに敬虔な生活である。

この後年内一杯は、領事館に来信を取りに行ったり多くの邦人にあったり (その大方は一高あるいは東大以来の友人らしく、中には神戸中学の同期生もあり、日本からあるいは旅中で託された品を渡した相手もある) に忙しく、

> (前略) 郵船会社に行き原田、市原両君 (注、未詳) に会ふ。六時半より Nottingham place の東洋館[22]にて斉藤、横山、宗、加藤四氏と共にスキ焼、雑煮、白あへ、味噌汁等の珍味を飽食す。マルセーユにて共同費用中に £15 出しておきたるに対し清算の結果 5 磅返却せらる。(後略、十二・22)

のような記事もある一方、次のように各種の施設を精力的に見学している。株式交換所のように専門に近いものもあるが、その他も単なる観光以上に、留学の環境 (イギリス乃至ヨーロッパの歴史と現状) を知りたいとの意図があったのに違いない。そのことは、後 (次回) にも引くが、大塚久雄のインタビューに応じた回想「私の歩んできた道」(『全集』第二十六巻) にも述べている。

> 十二・9　St. Jude's Church (注、「誰も居らず、暫く黙想し且つ祈る」)、隣の Toynbee Hall (注、その壁面の説明から「嘗て感激を以てよみたる Tom Brown's Schooldays 及 Titanic 沈没の記事」や事件を鮮烈に思い起こす)
>
> 同　Art Gallery (注、「家具の展覧会」で「picture はあらず、もとは真の Art Gallery たりしも後絵画は National Gallery に移せりといふ」とある)
>
> 10　「午前 Royal Stock Exchange を見る。中に歴史画あり (中略)。
>
> 午后 St Paul's Cathedral を見る。非常に stately なれども内部は陰鬱なり。」(後略、四時からの service を見学して「僧侶及 choir の少年達白き袈裟をきる。節をつけて祈祷

文をよむ。甚だ仏教に類似す」と言う）

14 新婚の友人（妻はスイス人）の「shopping に御伴して Harrods に行く。此の大なる department-store に驚嘆す。」

15 National Gallery（注、感想略）

16 同右

17 「Piccadelly 街 Royal Academy of Arts に Spanish Exhibition（of Paintings）を見る、古代及現代に分たる。多くの立派なる絵あり。」（詳しい感想略）

18 「午前 London Tower を見る。」（後略、武器・宝玉の陳列や「Sir Walter Raleigh 監禁の跡、拷問処刑具等見るに快からず」とあり、また一六一一年に Japanese Emperor から James I に贈った甲冑の由来を気にしている）

20 National Gallery（注、宗教画に対して詳しい感想あり）

21 Tate Gallery（注、Watts や Turner がその作品を秘蔵せず寄贈して公開されていることへの感服といくつかの絵に関する詳しい感想もある）

23 Tate Gallery, National History Museum

28 Wallace Collection（注、「Greuze の少女画」の他は「あまりに露骨なる裸体画多くして遂には不快になり」、また「家具類は貴族の贅沢を思はしめ其裏面に細民の涙と血とが聯想され武器は勿論流血と縁深く、要するに愉快なる見物にはあらざりき」とある）

31 British Museum（注、「Reading Room 入場の application をなす」他、「希臘ローマの彫刻を見る」）、King's College, St.Paul's Cathedral（注、「service に列す、大伽藍の中に唱歌を聞き乍ら去り行く年を思ひて主の恵みを感謝せり。」後略）

イギリス生活の始まった年内の記事としては、この他に「汽車の season ticket（注、Woodford～London [Liverpool Street] 間であろう）を買」ったり（十二・8）、The Alien Registry（注、外国人登録［事務所］）に至り余の姓名を登録せんと」行ったり（同・9、この日は「写真必要とのことにて後日を期」した）という、実生活に必要なことの他に、右に示した以外にも Mrs. Cook に伴われて教会関係の集まりに出たり（同・7）、落着いてから最初の日曜（十二日）に

附近の Union Church に伴はれ（注、Mrs. Cook にであろう）礼拝に列す（11—0.5）、異郷にあり外国人に交りて共に父なる神を讃美し感謝の落涙禁じあへず、（後略）

と記して、以後日曜ごとに教会に行っていることなども注意される。降誕祭当日も「礼拝に列」したこともちろんである。

天候（特に太陽や霧）や寒暖、「一面の積雪に驚喜」（同・12）のような記事、また読書のことも折々見える（まだ専門書は手にしていないが、八日と三十日に Stope[23] の *Marriage Love* と *Radiant Motherhood*（少くとも

前者は「井上に勧められて買ひたる」とある）を読んで「sexual union」をキリスト教の立場から論じているのも注意される）が、特に注目されまた微苦笑を誘うのは、到着の翌日に

（前略）領事館にて十月十八日、二十、二十一、二十三、二十四日附五通の愛子の手紙を受取りたり。（十二・4、翌五日には「愛子の手紙をよみ涙禁ずるを得ず」とあり、六日にも二十九日附のを「落手」している）

とあって、愛子は矢内原が神戸を出帆した日からほとんど毎日手紙を書いていたことが判るのに、翌週には

愛子より十一月三日消印の手紙来る、十月二十二日附余が上海より出せしものの返書なり。彼女は余の手紙が行かざれば余に書かぬにはあらざるか。（後略、十二・14）

と怒っていることである（但し、右に「後略」とした部分に「兎も角日夜彼女のことのみ思ひてぼんやりして居てはいかぬと気づきたり」とある）。そして「愛子の夢を見る」（同・20）「愛子より手紙来る」（同・21、愛子から手紙の来た日には必ずその旨を記したと思われる）の他に、

身体疲労甚し。愛子及伊作の事頻りに思はる。今後二年間彼等を見ること能はずとは如何なる孤独寂寞ぞや（後略、十二・30）

とあるのが、胸を打つ。

五

以上が留学第一年（大正九年）―と言っても正味二箇月半で、かつその前半一月半は船旅―の日記の主な記事で、留学者の誰もが持つ異国・異文化への関心・感想の他、深い信仰を抱いた敬虔な生活と家族（妻子）への愛情やそれに関する不安とが、特に印象的である。

こうした話題や特徴は二年目に入っても基本的に変らない。因みに彼の「留学は大正九年より大正十二年二月にわたるが、出発より大正十年十二月三十一日までの日記が、堅牢な表紙付ノートに記されている」と『全集』第二十八巻の「編集後記」にあり、留学後半から帰路までの一年余の日記は現存しない。

従って、ここではもっぱら二年目の記事を見ることになるが、その特徴は第一に、相当に詳しいことである。B6版（原則として毎頁四七字×一七行）の『全集』で一七四頁、一日平均約三八〇字で、一行あるいはそれ以下の日も少なくないが、二頁三頁あるいはそれ以上にも亙る日も散見するのである。後述のように昼間は専門の読書に精を出す日も多く、また妻その他への発信も多い中で、恐らく就寝前の何十分かを充てたのであろうが、その精進には感服する（尤も十年十二月の前半は「一寸日記を怠つて」一～十五日の分は十六日に記憶によってつけたようである）。

もう一つ気づく点は、金銭に細かいことである。これは既に一年目の記事にも見られたところであって、例えばロンドンで当初三泊した

「Palace Hotel を立つ」に際して、宿賃の他に waiter, maid, Lift（注、エレベーター・ボーイ）, Porter, 玄関（注、いわゆるドアマン）それぞれへのチップの額を記す（十二・6）とか、二年目では

（前略）昼飯は有名なる都亭にてうなぎの蒲焼を食うて好奇心を満足さす、10s. 茶代 2s. 置く。（1s. 貨なかりし為め。）（六・24、s. は shilling の略記）

とかのごとくである。日本（文部省）からの送金や銀行での両替のたびにその金額や換算率を記しておくのは、外国生活では普通のことであろう。そしてこれらは決して吝嗇というのではなく、豪も難ずべきことではない。恐らく几帳面な性格が経済学を修めて増幅されたものではあるまいか。

ここで二年目以後の彼の居所を『全集』の「年譜」から拾って示せば（角括弧内は今補ったもの）、次の通りである。この他に五月七日にウィンザーへの日帰り観光（図書館を見学し、イートン校をも一見）なども ある。なお、この期間の最初の部分に関して、この年（大正十年）三月十三日の記に

（前略）教会に行く。今後の留学期間の programme 左の如く為すべき旨突如として心に与へられぬ。即ち六月迄当地に居り、その後二ケ月又は三ケ月を巴里、白耳義、和蘭に過し、次の二、三ケ月を Edinburgh にて過し、それより独乙には明年六月頃迄居り、瑞西、伊太利及能ふべくんば埃及びパレスタインに二ケ月を過し、米国に三ケ月居り、留学を延期することなく即ち十二月二日を以て満期となり直ちに帰国の途に就くこととなす。

とあるが、この計画はかなり修正された。直接の原因は、フランスを在留国に追加する許可が当座得られなかったからではあるまいか。

大一〇・七・12～八・27「北ウェールス・アイルランド・スコットランドに旅行」
八・10　エヂンバラでアダム・スミスの墓を訪れる
九・12　ロンドン発［Harwich より汽船］、
13　［Hook of Holland より汽車］
ベルリン着（舞出長五郎[24]ベルリンに滞在中）、
19　Dahlem Werderstrasse 24, [Frl. von] Viebahn 方下宿
一一・一・31　フランスを在留国に追加される（注、以下は「日記」なし。主として書簡によって認定したものと思われる）
三・3　ハンブルク在
四・1　ベルリンよりプラハへ、2　プラハよりウィーンへ
10　フィレンツェ在、14　アシジよりローマへ（14～17の間に大内兵衛[25]にあう）、21　ナポリ在
25　エルサレム着、約二週間パレスチナ旅行
五・10　アレキサンドリアを発しジュネーブに向う

15　ジュネーブ着（川西実三宅[26]に泊り、新渡部稲造にあう）

21　ルツェルンを発ち Vierwaldstättersee を渡り、Rigi 山に登りチューリッヒに泊る

22　ドイツに帰る

八・6　ドレスデンを発ちワイマール・ワルトブルクを経てハイデルベルクに泊る、7　ハイデルベルクを発ちベルリンに帰る

28　ベルリン出発、29　パリ着（パリの住所 Chez Mlle. Bosq 11 bis Rue Chardin Paris 16e）

九・18　Fontainebleau の森へ遠足、Barbizon 村へ泊る（三谷隆信・舞出長五郎と共に）

十一・25　留学期間を大一二・三・三まで延期を許可される

一二・一・4　ニューヨークからワシントン着、6　ワシントンからボストンへ

11　バファにナイヤガラ瀑布見物、15　Grand Canyon National Park

16　ロスアンゼルス着、19　サンフランシスコ着

23　サンフランシスコ出帆

二・9　横浜上陸

この中でも「日記」に記されている大正十年夏のウェールス～スコットランド旅行の記事は、その方面にも関心が深かったのかまたは記録好きだったのか、汽車・汽船の発着の場所・時刻や乗換の状況の詳しいことや「England 及 Wales にての最高峰なれども僅か三、五六〇呎」の「Snowdon Summit」（七・18、これはバスツアー）や「英国最高峰 Ben Nevis（4,500 尺）に登」ったり（八・5）、また広く美しい自然に心が晴れたり、ダブリン郊外の Belfast に同地で建造された「Titanic 沈没の記念碑」を見たり（七・21）あるいは RobertBurns の生家を訪ねたり（同・25）、また「神曲」の煉獄篇を読んで感想を記したり（八・3）と拾いたいものは多いが、紙数の都合で割愛する。ただ Invernessの Ness 川の河口でたまたま入った質素な教会で簡素ながら信仰篤い礼拝に接した感動と興奮（八・7、翌日愛子に絵葉書で報告しており、十五日付内村鑑三宛書簡〈「倫敦だより」として『全集』第二十六巻所収。初発表は『霊交』第一号＝大一〇・一〇の由〉にも詳述している）は、後々まで忘れがたいものであった。

また「年譜」には指摘していないが、旅行の最後には「Shakespeare の birthplace」や Oxford, Cambridge（この両校を一見しての感想は、第六章の末尾に紹介する）また Bunyan の生地 Bedford をも訪ねている。

ベルリンでの日常は

家庭生活は朝八時頃起きて Gebet（=prayer）. 九時朝食、食後 Frau u. Frl. v. Vie-bahn, 女中二人（注、Hanna と Ida）と余とにて

集り、（中略）それから祈祷、イギリス人は跪きて祈るに反しドイツ人は起立して祈る。それから Hanna と共に Domane（注、辞書に「御料地」「専門領域」の二義あり、帝室牧場のようなものかそれとも専門店か）へ Milch（=milk）買ひのお伴す。之が仲々面白い（注、往復に見る光景や店の様子がか、それとも彼女の話や態度がか不明だが、縁談を打明けられて同情した十一・14によれば主に後者か）。昼食時までドイツ訳の聖書をよむことにす。ドイツ滞在中に一回通読することを発心し創世記より始めた。（九・21）

とあり、また

（前略）イギリスでは Cook 婆さんや家族とよほど親しく友達になつたが女中は用事以外は一度も余に物をいはず非常に間が隔りて居た。ドイツでは正反対に家族の人はなかなかツンとして一寸親密なる情が起らぬに反し女中は非常に freundlich（=friendly）だ。（同・24）

ともある。そして「Hanna は gentle で Ida は活溌だが二人ともよい女だ」（同・19）と言い、特に Hanna（仮名でハナと書いた箇所もある）とはよく心が通っていた。[27]

ついでに独英の比較としては、祈りの姿勢のような具体的なことの他に、一種の国民性の観察として、

（前略）Speyer & Peters（注、ベルリンの本屋の名）にて Luther の全集を注文し Momsen[28] 及 Ranke の歴史を買った。（中略）家へ帰つてから本屋の勘定が 50 マルク程沢山取られたのではないかと気付いて不愉快だつた。代金支払、勘定等はイギリスの方が遥かに気持ちよく正確だ。イギリスでは前金支払など一度もしたことなかりしに独乙では下宿代、新聞代、洋服代等前金支払なり、イギリスの方が商売上の信用が厚いのか知ら。（十・12、ドイツのこの状況は、几帳面の民族性に加えて第一次大戦後の経済困窮の影響もあるかも知れない）

あるいは

今日は Busstag[29] にて一般の休日だ。Busstag に büssen（注、「罪を悔い改める」の意）するものも少いだらうが兎に角英国の Bank holiday（注、イギリスの法定休日）が英国（商売）流なるに対し Busstag は独乙（宗教）流だ。（中略）夜はベルタさん（注、下宿の女主人であろう）の主催にて友人 Gesangstunde（*lit.* Song Hour 歌唱グループの名であろう）を宅に招待し僕等も一緒に加へられて面白かつた。歌の実に上手なのは気持ちよい。独乙人の方が英人よりは面白く英人は日本人より面白い。どうも日本人の Gesellschaft（=company 仲間、パーティー）が一番面白くない様に思ふ。（後略、十一・16）

といった記述があり、最後の段落では日本人との比較にも及んでいる。

さてベルリンでの生活は、動植物園や博物館・ポツダムなどの見学とか日本人留学生との交際、散歩（何度かハンナと一緒）など、個々には興味深い観察や記述もあるが、今は省略する。ただ、Lichterfelde（注、地名か）の集りなるものに出てみて（平行してベルリンの Bergstrasse の

集りというのにも行っている)、途中から彼等の偏狭な態度に論争となり、意を尽くして弁明した記事(十・16以後)が印象的である。

六

「日記」が残っている二年目の主な話題を大まかに分類すると、①専門の勉学、②趣味的な見聞、③信仰の吐露、④家族への思い、などとなろう。

第一の専門の勉学は、矢内原の留学(文部省からの派遣)の目的が「植民政策研究のため」であったことは冒頭近くに述べた。その場所・方法として彼は、当初のイギリスでは主として大英博物館の閲覧を採っている(言うまでもないが、大英図書館が博物館から分離したのは一九七三年である)。

すなわち当座の挨拶回りや買物も一通りすませた一年目の大晦日、

British Museum に行き Reading Room 入場の application をなす、(大九・十二・31、このあと、前記のように「希臘ローマの彫刻を見」た)

とあり、早速翌元日から通う。但しこの日は午前に専門とは言えない、しかし彼の大きな関心事であった「Stope(注23参照)の」「避妊に関する」「小冊子」[30]を一覧しただけだが、七日(金)の条に

終日 British Museum の Reading Room にて読書。今日より "Wealth of Nations" をよむ。勉強に渇せる心地す。(大十・一・7)

とあり、[31]以後十一日(火)まで、多くは午前だけで書名を挙げない日もあるが、日曜以外は連日精勤している。しかしそれがあまり急激だったせいか、翌十二日以後「読書の念なく」あるいは「身心疲労」と記す日もあるが、それでも十四日(金)には「身心疲労稍々恢復し終日 British Museum に読書す」とあり、翌日も午前はそれを続けて、遂に三月八日(火)に

二時過まで Reading Room にありて "Wealth of Nations" を読み終る。

とある。あの「国富論」を丁度二箇月で読破したのである。途中、「一日より四日迄 Reading Room 閉鎖につき如何にして暮さんかと思ふ位なり」(三・3)と言う勉強ぶりで、稀に「朝汽車を miss して勉強の時間を失ひ Museum にては Greek & Roman Life の室にて少時間見物」した日(二・5)もあるが、やはり相当の精励と読書速度である。

「国富論」に平行して(と言うよりも主として気分転換のためであろう)、Shakespeare の *Midsummer Nitght's Dream*(一・17)や「Delitzsch[32] の Job 記第十九章の解釈をよみ、又 Medelssohn の略伝及その Oratorio "Elijah"」[33](二・8)あるいは「Ricardo 全集の始め Life & Work」[34]などを読んでいる(尤も最後者は「少し読みしもいやになり日本飯食ひたくなり〜」とある)。そして三月八日すなわち「国富論」を読破した翌日にはもう、

Reading Room の仕事は Ricardo を始む。

と、先日ちょっと覗いたリカードに取りかかったようでもあるが、この場合も「William Blakeの Job を見[35]且つ彼の小伝をよみて感動し」（三・9）、翌日ある本で「Blake のことを尚少し読み」（後略）とある。そしてリカードは止めたのかそれと平行してか、翌週以降「Jevons の "Theory of Political Economy" を」（三・15）読んでいる（18、21、22、31にも見え、四月一日「読み終る」）。

こうした読書の一方、四月からは School of Economics & Science で「Mr. Joynt の Economic development in the British Empire」（四・26）や「Dr. Knowles の British History of Commerce and Colonization」（同・27）の講義を聴いている（なお後者には、「Dr. Knowles なる人の女であつたのに驚きたり。やはり男の方がよい」との感想が付いている）。これらの読書や聴講にもよってであろう、「英国には植民につき組織的に研究せる書物殆ど皆無なり」（六・3）と言いながらも「大分勉強が捗取つて拓殖局（注、当時内閣の下にあった機関。拓務省の前身）に送るべき論文「英国植民省に就て」の材料が大分出来た」（同・8）と言い、翌日から執筆にかかって、一時「あたまが痛くて（注、連日根をつめた上に数日前の寒さで風邪を引いたか）勉強を休む」（六・23、この前後の日も「勉強せず」とある）が、時には昼飯も抜いて（六・7など）精励した結果、

（前略）今日も少し空腹を感じたが馬力をかけて原稿執筆に努力し遂に昼飯にも行かずして「英国植民省に就て」といふ原稿（五十六枚）を終了した。万歳！（七・5）

と記すに至る。

なお、

Cambridge University Press 及 George Allen Unwin にて大学の為め購入したる書物の list を丸善及経済学部に送る。若し研究室にあるのと double せるときは余が購入して差支なき旨（もし丸善で引受けられぬ時は）大学へ言つてやる。（五・4、四・25にも同じ話題あり）

本日経済学部及丸善宛 Longmans Green & Co. 及 Clarendon Press にて研究室の為め購入書物明細書送附す。（六・3）

などと新設学部の図書整備に協力しているのは、東北大学法文学部における阿部次郎や小宮豊隆[36]らと同様である。

ベルリンに移ってからは、図書館や読書の記事は見えないが、Lessing Hochschule 主催で Oberrealschule（注、実業高校）で行われる「伯林大学教授 Dr. Paul Leusch の "Nationalökonomie auf Marxisischen Grundlage (=National Economy on the Marxian Ground)" といふ六回講演を聞」き（十・17）、また「Momsengymnasium（注、あるいは Mommsen ―か）にて Sombart の Kapitalismus といふ講演の第一回」（十・28）そして恐らくその第五回（十一・25）を聞いている。

また、専門からは少し外れるが、

今週より伯林大学の神学部学生 Herr Schrank といふのが火曜と木曜に来て火曜には Kant の Kritik der Reinen Vernunft（注、純粋

理性批判）を、木曜には Griechische Grammatik（＝Greek grammar）を習ふことにす。報酬は一回十五麻（注、マルク）、此外に電車代二麻与ふことに約束す。今日は其第一回をやつた。いろんな事が聞けて面白い。もつと早く学生を得ればよかつたと思ふ。（十一・15）

という記事もあり、以後何回かこの個人教授にも言及して、一箇月余り後には

（前略）本日始めてギリシャ語馬太伝（注、マタイ伝）第一章（注、尤もその前半はほとんど人名の列挙だが）をよんだ。何だかうれしかつた。（十二・22）

と書くまでになる。

更に「独乙革命三周年の記念日」に各地で行われた「Sozial-demoratische Partei（注、社会民主党），U. S. P. D.（注、独立社会民主党）及産業組合聯合の示威運動」の一つをある広場で見学して、「赤旗だの三色旗（国旗）だの "Proletariat aller Länder, vereinigt euch!"（注、「万国の労働者よ、団結せよ」の意）だとかいふ旗を掲げて多数（中略）が集り演説があつたが歌一つ歌ふでなしワイワイいふでなし、巡査は一人も居らず其静かなるに驚いた。（後略）」とあるが、これも専門研究の一環と言える。

一方、研究と言うよりは教育の観点だが、オックスフォードで「College なるものの概念がはつきりした」と言い（ただ、本来半日程度の見学で解るものではなく、「要するに寄宿舎だ」と言っているのは乱暴に過ぎる）、いくつかのカレッジを見た結論として

（前略）日本の大学生活に character building 及 friendship making の欠けたる を痛切に感じ factory system 大量生産主義教育の弊害を歎かざるを得なかつた。（八・25）

と述べ、翌日はケンブリッジでは「多数の College を見」て、

（前略）無形の点よりいへば character building, 有形の点よりいへば大学の museum 及 gallery を我国大学に必要と感じた。沢山の古文書名画等を持つて居ながら土蔵の中にしまつておく程馬鹿気たことはない。宜しく立派な陳列場を設けて学生始め公衆に観せるべきだ。（後略、同・26）

と言っている。第一の人格形成と友情育成は、矢内原自身の体験（一高）から言っても旧制高校ではそれがかなり満足すべき状況にあったと言えるが、彼はここで大学教育にもそれを求めていたのであって、日本の大学が全く少数のエリートのみの教育機関であった当時に、このような点を指摘した洞察の深さには敬服させられる。戦後彼が東大教養学部長に選ばれたのも適任であった。第二の大学博物館あるいは美術館の提案も、欧米の諸大学を見れば容易に思いつくこととは言え、東大や京大が甚だ小規模でもそれを実現したのが戦後も大分経ってからのことであるのを思うと、やはり彼の先見性に打たれる。

第二の趣味生活およびそれ以下の点と河合栄治郎については、次回に譲る。

注

(1) その事情はよく知られていると思うが、矢内原は直接には昭和十二年に発表した論文「国家の理想」(『中央公論』九月号)などが問題とされ、同年十二月に辞表を提出した。一方河合は同十三年『ファシズム批判』などが発禁となり(いわゆる河合事件)、翌年二月休職となった(平賀粛学)。その間および以後の事情については、当事者や関係者の回想弁明も多いが、『東京大学経済学部五十年史』に簡潔な、また『東京大学百年史部局史二』に詳細な記述がある。

なお、筆者は戦後在学していた高校(旧制から新制にかけての武蔵高校)で、上級生に非常勤で(学習院在任中か)哲学を教えておられたその令息(長男)伊作氏を廊下でしばしば見かけていたのみならず、御本人は筆者が東大教養学部に入学したとき(昭和二六年)は教養学部長(総長は南原繁氏、余談ながらその令息たちも高校で一年上と下とであった)、文学部を卒業するとき(同三〇年)には総長であった。そして二度聴いたその演説(正しく言えば式辞)、特に内村鑑三の墓碑銘("I for Japan; / Japan for the World; / The World for Christ; / And All for God." 因みに彼の墓は多磨霊園の一角にある)を引いて結んだ卒業式の式辞は、今も感銘深く記憶している。従って、直接会って話したり教室で授業を受けたりしていなくても「先生」と付し敬語を使うべきかも知れないが、本稿の学術的性格から、それらは省く。注3の伊作についても同じ。

(2) そのいくつかは昭和二十年代前半にはしばしば古書店で見かけたものであったが、『河合栄治郎 伝記と追想』(社会思想研究会編、昭二三・同会出版部)に付された「河合栄治郎著作目録」によってそれらを列挙すれば、以下の諸書である。

『学生と読書』『学生と学園』『学生と哲学』『学生と社会』『学生と科学』『学生と歴史』『学生と日本』『学生と芸術』『学生と先哲』『学生と教養』『学生と生活』『学生と西洋』

因みに、河合の受講生の一人でその学統を受ける大河内一男(東大教授、後に学長、筆者から言えば中学時代以来の友人暁男氏の父君で、以下に挙げる編書も頂戴したが、これも呼び捨てとしておく)に、戦後「学生シリーズ」と銘打った『学生と社会』『学生と読書』(以上、日本評論社・昭二五)、『学生生活』(新評論社・昭二七)がある。もちろん戦前の河合の編書に倣ったものであろう。

(3) 以下、矢内原の事蹟で大正九・十年の「留学日記」に記すところの他は、各種の人名辞典の他、主として『矢内原忠雄全集』(以下「矢内原全集」、河合の全集と混同する惧れのないときは単に「全集」と略称する)第二十九巻の「年譜」による。ただこの年譜は甚だ詳しく、主要事蹟をたどるには、南原繁他編『矢内原忠雄—信仰・学問・生涯—』(岩波書店・昭四三)の末尾の略年譜)と伊作の『矢内原忠雄伝』(みすず書房・一九九八、もと『朝日ジャーナル』一九七四・一一・一〜一九七五・一二・二六に連載されたものの由。内容的には未完に終ったが、本稿の範囲には不自由ない。以下「忠雄伝」と略称する)のそれとが便利である。

(4) 『忠雄伝』も引くが、当時の同僚で後に歌人として名をなした山下陸奥の「新居浜時代のことなど」(前注所掲『矢内原忠雄—信仰・学問・生涯—』所収)によれば、矢内原の部署は初めは経理課、後には調査部という「重要な部署」であったという。

(5) 矢内原について多少とも知る人には言うまでもないが、愛子は矢内原の一高・東大ならびに内村鑑三の柏会での先輩藤井武の妻の妹であった。

(6) 伊作の名は、「旧約聖書」冒頭のアブラハムの子の名であるとともに、伊予で生まれたとの意味も込めてあると、注4に挙げた山下の文にも説かれている。

なお、彼が生まれた直後(五月十二日付)の忠雄宛内村鑑三書簡に「伊作は其の意味通り「笑」を供する者となり」とある。ヘブライ語で Yiṣḥāq が he laughs の意であることと言ったものである(このこと、高木久夫氏に質して知った)。

(7) すでに新居浜で伝道生活をも始めていた彼のその間の心の動きについては、八年初冬頃(日付なし)の妹悦子宛書簡(『全集』第二十九巻所収)や後年の回想「私の歩んできた道」(大塚久雄のインタビューに答えたもの。同第二十六巻所収)また「おのれを語る」(同巻所収)などに述べられているが、今はそれにはふれない。

(8) 注3に挙げた『全集』の年譜やそれによったと見られる「略年譜」および『忠雄伝』には「奥多摩郡」とあるが、今改めた。

(9) 言うまでもないかと思うが、SS. は Steamship の、N. Y. K. は日本郵船株式会社の各略記。また次行以下の人名では、先ず小林辰男は『大人名辞典 現代篇』の記述を『文部省職員録』や『東京大学百年史 部局史二』で補えば、明治十九年生まれ、大正七年東京帝国大学理科大学物理学科卒(年齢は矢内原より六歳半ほど上だが卒業は一年後)、翌八年同大学助教授、九年から二年間欧米に留学、十年同大学航空研究所所員(『百年史』によれば十二年には理学部物理学科で航空学の助教授)、昭和二年教授(これも『百年史』

によれば六年以降は理学部で「物理金相学の授業を担当」している)、同十三年理学部教授を兼任、同二十三年退官、同四十三年没。

文部省の三氏はそれぞれ、当時(『文部省職員録』のこの年のが国会・東大どちらの図書館にもないので、前年大正八年のを見る)文部書記官で参事官を兼ねていた(等級は違うが)窪田治輔・赤間信義(それぞれ専門学務局第二課長・普通学務局第二課長併任)と文部事務官菊池豊三郎(宗務局第一第二課長併任)とであろう。「望月氏」は大正八年の右『職員録』には(まだ富山薬専が創設されていないため)見えないが、同十二年のに教授で生徒監とある望月直、「森元氏」はこの前後の『学士会会員氏名録』に「東北大医学部医化学教室大学院学生」と記された「森元良雄」(明治三九年京大医学部卒)と思われる。「武藤氏」は一高の第六代校長(大四・四〜一〇・一一在任)武藤虎太(『旧制高等学校全書 第一巻』や『天は東北—旧制高等学校物語—(一高篇)』にもよる)だが、「左竹氏」は未詳。「国際交通会議」もその所属よりは訪欧の目的らしく思われるが、不明。

(10) 「旧約聖書」出埃及記(今は「出エジプト記」と書く)一三章二一・二二節に

ヱホバかれらの前に往たまひ昼は雲の柱をもてかれらを導き夜は火の柱をもて彼らを照して昼夜往す、ましめたまふ　民の前に昼は雲の柱を除きたまはず夜は火の柱をのぞきたまはず(手元の文語聖書により、大部分のルビを省く)

とあるのにより、神の導きを言う。この段落の最後の Isaac は無論長男伊作のこと。

(11) シサカジマ。瀬戸内海の燧灘、新居浜と今治とで正三角形を作る位置にあり、五つの島から成る。その一つ「家ノ島」に別子鉱業所の精錬所があり、陸続きの美濃島には社宅があった。新居浜の社宅に住み、国領川を四国山脈に向って遡った鉱業所に勤務していた彼は、平素そこに居たわけではないが、かつての勤務先の縁でなつかしく眺めたのであろう。

(12) 『昭和人名辞典 第1巻[東京篇]』(日本図書センター・一九八七、帝国秘密探偵社・大一四第一版昭一七第十四版の『大衆人事録』のリプリント版)によれば(読点を補う)、明治十六年生まれ、「大正四年東大理科(注、『学士会会員氏名録』によれば物理学科)卒業、東京電気(注、昭和十四年に芝浦製作所と合併して東京芝浦電気、今日の東芝となる)に入り技師に就任、此間再度欧米を視察」、後に「東京電気(株)取締電子工業研究所長」。『日本博士録』によれば大正九年八月すなわちこの訪欧の直前に東北大から理学博士の学位を得ている。この日記の二年目(大一〇)七月一日の条によれば、この船に同乗した安井さんなる女性と結婚したらしい。

(13) オストロフスキー家の女性(妻か娘)であるが、Michaud の *BIOGRAPHIE UNIVERSELLE*(世界人名辞典) Nouvelle edition に "OSTROWSKI (Jean-Antoine, comte d)" というのが見える。一七八二年にワルシャワで生まれて一八四五年にパリで死んでいるが、父とともにポーランドの軍人・政治家でナポレオン一世の時代に活躍し、晩年はパリに暮らした。姓と爵位やフランスとの縁から見てこの人物の孫あたりで、そして前引の「ポーランド人五」というのが彼女とその家族であって、しばらく滞在した日本からフランスあるいは父祖の故国へ帰るところだったのではあるまいか。

(14) 因みに英独語には不自由しなかったらしく、現存の「留学日記」はイギリスとドイツの部分だけであるが、曜日や固有名詞以外もしばしば単語や語句を原語で記したり(前引の出帆の記事参照)時には短い文(大十・三・14など)あるいは一日分(大九・十二・16、十・二・2、3など)を滞在国の言語で書いたりしている。

(15) 「四馬路」は、先年「寺田寅彦の留学日記」(ICU『人文科学研究 キリスト教と文化』第二九号、一九九八・三)の注23に述べた通り、福州路(現在はもっぱらこの名)の別名で、当時は脂粉の匂いが濃かったのは有名。その前の「太馬路」は右の注にも挙げた『最新上海地図』(昭七)に「南京路(ママ)(大馬路)」と見え、福州路の北側三本目(因みにその間の二筋はそれぞれ通称二馬路・三馬路、今日の南京東路の別名と解る。当時の競馬場、今の人民公園の北端から東に延びる大通りである。

(16) 『学士会会員氏名録』大正六年以降に見え、同年法科大学経済学科卒(矢内原と同期)。同年版〜十二年版に三井物産上海支店勤務とあり、以後名古屋支店に転ずる。

(17) 当時の船旅では、スエズで下船して駱駝や汽車で観光してポート・サイドやアレクサンドリヤで再び乗船する人もあり(手許の紀行から一、二例を引けば、大正十二年に大阪時事新報が国画制作協会の画家たちを派遣した『欧州芸術巡礼紀行』や昭和八年に「欧州赴任の旅」をした瀬川杢四郎なる人の『旅ごろも』がそうであり、藤井専隆著・藤井照雄編『大正末期の世界を見て』は日本への帰路にポート・サイドからカイロを観光してスエズで再び乗船している)、この船の場合もスエズで「乗客大多数四十人許り団体つくり Cairo 見物の目的にと上陸せしも(注、矢内原は) Passport に埃及なる記載なき為め官憲の許可を得ず空しく帰船」(十一・24)とある。

(18) 聖書の他に船中で、「藤井兄（注、前述のように妻の義兄）より貰ひたる」*Comfort & Strength from Shepherd Psalm*（十一・11）や「隣室の加藤正男君より」借りた「"Centenary of Singapore 1819—1919. Raffles." by J. A. Bethune」（同・11～18）も読み、特に後者で「Raffles の信仰による強き性格に感動し」てその生涯を要約するとともに、宣教師であった著者の記す「Morrison, Milne」ら当時の宣教師の伝道法すなわち先ずその地の言語を、ついで風俗習慣を学び、また必ず印刷機械を携えて聖書を翻訳出版した「彼等の熱心」に「尠からず感動」している。

(19) 留学日記では芳賀矢一（シンガポール）・島村抱月（コロンボ）・寺田寅彦（シンガポール）がそれを記していることを、注15に挙げた「寺田寅彦の留学日記」にも述べた。

(20) 矢内原の一高・東大時代の仲間「読書会」のメンバーで、大正六年内務省に入り、同九年外務省に移っていた。戦後（昭和二三～四〇）侍従長。女子学院の院長を勤めた民子の異母弟で、法哲学者（六高・静岡高校・一高でドイツ語や法制を教えた）でキリスト教教育者でもあった隆正の同母弟。パリで会って舞出（注24参照）とともに遠足し、三人で愛子に寄せ書きしている。

(21) 前日夫妻で Victoria Station まで出迎えてくれた井上康二郎。この日の冒頭の叙述その他によれば領事館勤務らしく、またこの日も翌日もその家で「夕飯の馳走」「日本飯の御馳走」になっている。そして五日の条には「一高時代の話をなし大に愉快なりき」とあり、同窓と判る（なお続けて、「井上君 sexual education の必要を大に説く」ともある）。この後も矢内原はロンドン滞在中しばしば彼の家で夕食を馳走になったりして、「倫敦滞在中随分井上の家庭の世話になり慰められる処が多かつた。真に感謝である」（九・10）と記している。

(22) 在留邦人がしばしば利用した日本レストランの名。ベルリンにも同名のがあって（一種のチェーンであろう）、それについては「文人学者の留学日記 大正篇—阿部次郎（続篇）と小宮豊隆—」（ICU『人文科学研究 キリスト教と文化』第二八号、一九九七・三）の注10にふれた。ここの Nottingham place というのはリージェンツ・パーク Regent's Park の南、メルリボーン Marylebone 地区の一角。

(23) 正しくは Stopes, Marie Charlotte Carmichael（1880—1958）. 英独仏の浩瀚な人名辞典類には見当らないが却って『岩波・ケンブリッジ世界人名辞典』（その原本は *The Cambridge Biographical Encyclopedia*, 1994）に見え、イギリスの「産児制限の提唱者、婦人参政権論者、古生物学者。（中略）「避妊法—その理論、歴史、実践」（一九二三）、「性と宗教」（一九二九）など七〇冊を越える著書がある」（原文横書・算用数字、句読点はピリオド・コンマ）と記されている。中略部分の経歴を以下に挙げる著書の扉等で補えば、ロンドン大学理学博士、ミュンヘン大学 PhD. 王立文学協会会員。矢内原が日記に挙げた書名のうち、*Marriage Love* は *Married Love*（A New Contribution to the Solution of Sex Difficulties と副題。初版の年代は未調だが多くの版を重ね、矢内原が見たのよりは後だが、国会図書館には一九二二年ニューヨークの、東大教養学部図書館には一九二六年の版がある）の誤記。*Radiant Motherhood* は A Book for Those Who are Creating the Future の副題を有し、刊年不記の第四版が東大総合図書館にある。

因みに、その名は『来日西洋人名事典』や『知日家人名辞典』にも見えないが、彼女には *A Journal from Japan / A Daily Record of Life as Seen by a Scientist*（1910）や *Plays of Old Japan/The "No"*（1913, Prof. Joji Sakurai と共著、能の解説と五曲の英訳）の著作もあり、また前記の辞典や著書の広告（"By the same Author" など）には見えないが、同名の著者の *Shakespeare's Family*（1901）その他いくつかのシェークスピアに関する著作も、右書の各章が当初 *Genealogical Magazine*（系譜学雑誌）に発表されたという点から、彼女の若い頃のものと見てよいであろう。

(24) 経済学部での同僚。大正六年（矢内原と同期）東大法科大学政治学科卒、同八年一月同学部（四月以後は経済学部）助教授、九～十一年欧米留学、十二年教授。「平賀粛学時と戦後の再建時との二度の難局時に経済学部長」（日本人名大事典）。矢内原はベルリンで彼とたびたび本屋を歩いたり訪問しあったりしている。

(25) 東大教授から法政大学総長を務めた高名な経済学者。大正二年法科大学経済学科卒。大蔵省勤務の後、同八年東大助教授（経済学部、財政学）。翌年一月「森戸事件」に連座して起訴され休職（矢内原とすれ違い）、有罪となり十月退官。その後独・英・仏に留学し同十一年帰国（留学中に復職）、翌年教授。以後の経歴は省略するが、森戸事件や矢内原事件のことを含めて、河出新書『私の履歴書』（昭三〇）に詳しい回想がある。このときはハイデルベルクに居り、一日（十二・22）訪ねてきたのである。後（次回）にも引くが、注3に挙げた追悼文集『矢内原忠雄—信仰・学問・生涯—』の巻頭に「赤い落日—矢内原忠雄君の一生—」を寄せ、留学時代の矢内原の様子にもふれている。

(26) 労働・厚生両方面に尽した内務官僚。大正三年法科大学独法科卒。九～十五年国際労

働連盟帝国事務局事務官としてジュネーブに駐在。注20の三谷隆信は妻の実兄。神戸中学で矢内原の三年上級で、深い感化を与えた生涯の友人。矢内原は彼の影響で一高を志望したし、「生涯の師ともいうべき新渡部稲造と内村鑑三の門をたた」いた（『忠雄伝』）のも、彼の手引によるものであった。これより先、二月末にはロンドンの矢内原の下宿に三泊し、矢内原は注21の井上らとロンドンを案内している。

(27) 例えば彼女と知り合った比較的初期に、次のような記述がある。

（前略）Nahm zum erstenmal Hannas Arm（=Took for the first time Hanna's arm）!（九・29）

（前略、過日彼女の案内で知った教会の集りで前夜不快な思いをした）余は Hanna を愛すること深きが故に昨夜の次第を話して再び Versammlung（=meeting）に行かぬと思ふことを話したら果たして彼女は非常に悲しんだ。帰宅してからも余の室へ心配をしてやつて来た。余は余を信じ愛してくれる妻子朋友の居る日本へ帰りたく思つたといつたら彼女は非常に泣き出して何卒まだ帰らないで居て下さいと言つた。本当に Hanna は僕を信じてくれる、愛してくれる、慰めてくれる。此際 Hanna が居なければ僕はどんなに淋しいかしれない。（十・17）

そしてその後も日記にたびたび彼女の名は見え、

（前略）今日はハナが度々 besuchen（=visit 部屋へであろう）してくれて大変うれしかつた。（十一・1）

更に

（前略）実に彼女は短き間の友人なれども今や世界に於ける余の最大の、最も余の胸に近き友人となつた。若し余が未だ独身であるならば彼女を妻とするかも知れぬと思ふ程だ。（同・14）

とまで記すのである。

(28) Momsen（モムゼン）は正しくは Mommsen, Theodor（1817—1903）. 古代史・ローマ法の専門家で、『ローマ史』三巻によって一九〇二年ノーベル文学賞を受けた。Ranke, Leopold von（1795—1886）は更に有名な歴史家。ここは二人の共著ではなく、それぞれの著作を買ったものと思われる。

(29) 『独和広辞典』に「贖罪の日」とあり、der Buß- und Bettag を「贖罪祈祷日（新教の祭日で十一月中旬）」とある。ここもそれであろう。

(30) 前述（注23）の巻末広告に挙げる諸書を見ると、あるいは *Wise Parenthood*（副題 *A Practical Sequel to "Married Love" / A Handbook on Birth Control*）かも知れない。頁数は不明だが三シリング六ペンスである（*Radiant Motherhood* は六シリング、前引の辞典にも訳題で挙げられていた *Contraception*（*Birth Control*）*/Its Theory, History and Practice / A Manual for the Medical and Legal. Professions*）は更に高くて一二シリング六ペンスである。

(31) *Wealth of Nations*（正式題名は *An Inquiry into the Nature and Causes of the Welth of Nations*）すなわち「国富論」あるいは「諸国民の富」は夙く明治一七～二一年に石川暎作・嵯賀正作の訳があり、別に抄訳（明四三）も出ている（これらのことは『近代日本哲学思想家辞典』付録「翻訳文献リスト」および『本邦アダム・スミス文献』［増訂版］によった。後者には三辺清一郎「国富論の邦訳について」がある）が、無論原著を読むべきだと考えたに違いない。

因みに、東大経済学部には、新渡部教授が大正九年にロンドンの書店で購入して寄贈したアダム・スミスの旧蔵書一三〇余部三百余冊が「アダム・スミス文庫」として蔵されている。

(32) Franz Julius Delitzsch（1813—1890）. ドイツの旧約学者。「保守的・実際的な立場から、包括的な聖書注釈を著わし、今なお読者を持っている」（『キリスト教人名辞典』）という。矢内原はこの後四月一日に、彼の箴言・雅歌・ヘブル人への書（あるいはヘブル書、現称「ヘブライ人への手紙」）の各注解を購入している。

(33) メンデルスゾーン三五歳の一八四四年作。「旧約聖書」列王紀略（現称「列王記」上・一七～一九章のエリヤの事蹟に取材したもの。要点は *The New Grove Dictionary of Music and Musicians*（Mendelssohn（Bartholdy）の 11.ORATORIOS の項）や平凡社の『音楽事典』（旧版）あるいは『ラルース世界音楽事典』（共に「エリア」の項）などに説かれている。

(34) リカードの全集の恐らく冒頭の解説であろう。但し現在全集とされる Works and Correspondence of David Ricardo は一九五〇年代の刊行である。

(35) 前年に Tate Gallery を見た日、次のような体験と感想を記している。

Blake の特色ある画数点あり、多く題材を聖書及 Dante より取る。余は Dante を知らざる故その題材に関する画については感興少かりしも彼の "Satan smiting Job" 及

び "Elijah about to go up heaven on the wagon of fire" の二画は其深遠なること測るべからず。Job 仰臥し Satan 其上に立ち苦しみの杯を注ぐ、Job の妻は Job の足下に座し髪を以て顔を掩ひてなげく。見よ Job の端然として伸ばされたる両手を！之れ実に深き Job 記の註釈論なり。余未だ斯くの如きものを見ず。（十二・21）

(36) このことに関する二人の行動については、注21に挙げた「文人学者の留学日記 大正篇 ―阿部次郎（続篇）と小宮豊隆―」の注8にふれた。

（付記）本稿第六節の冒頭に挙げた主な話題の分類は、国際基督教大学大学院に在学する原育子さんの考えついたものである。筆者が一九九八年度冬学期に担当した修士課程の講義（演習形式）「比較文化特論」でいくつかの留学日記を取り上げた際、矢内原のそれを担当した彼女（当時修士課程二年）が、彼の「私の歩んできた道」や大内兵衛の「赤い落日」などを紹介するとともに、この分類を示したことを、ここに付言しておく。